

---

# 改変世界がネットゲで

否憑 零華

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

改変世界がネットゲで

### 【Nコード】

N2187BA

### 【作者名】

否憑 零華

### 【あらすじ】

俺達の世界にネットゲが上書きされた！？元の世界に戻す？んなもんするか！ネットゲだったらクリアするしかないだろ！まずはレベル上げだ！…なん…だと？ステータスがバグっている…

処女作です、よろしくお願いします。

第零話 プロローグ前（前書き）

処女作です、よろしくお願ひします。

## 第零話 プロローグ前

空が紅く染まる世界で僕は沢山の人と出会った。

真っ赤な眼をした殺人鬼

「最低だよ、人類の中で最もな」

真っ青な瞳の科学者

「君は終わらせたいの？それとも、終わらせたくないの？」

不死で不滅の司書

「お前は結局何をしたかったんだ？」

そして、唯一無二の魔法使い

魔法使いは、相棒は僕に問う。

「あなたの、お名前は？」

僕は…

プロローグ

「Devise on」

俺の声に反応し、デバイスが起動する。

さっそくメールを確認し、返信しておく。

それから、ここらのエンカウント率も調べておく。

「はあ、今日は結構高いな」

エンカウント率とは、モンスターとあう確立のことで、

この確立が高いとモンスターに出会いやすくなる。

目線をデバイスから道の先に向けると…

「げっ」

モンスターがいた。それも大量に。

一ついっておくと俺は一般人だ。残念ながら。なんの特殊能力も戦闘能力の無いと自覚している。

だからモンスターと出会った時は…

「ふ」

見敵必殺？違うな、見敵逃走だ。俺は逃げ足だけは異常なまでに速い。

生きていく上で必要なスキルだ。自然と身につく。

走ること約十分。ようやくモンスターの姿がなくなった。

モンスターの大量から逃げて角をまがったら、そこでまたモンスターが現れるという悪循環。

久しぶりにガチで走った。そのせいで、現在絶賛迷子中

そもそもモンスターなんかいるのが悪いんだ。まったく、実際に自分が体験すると

面倒このうえない。『ソア』には悪いことしたな。いや、今は俺が

『ソア』な訳

なのだが。ああ、思い出す。あの部屋で行なっていた命の駆け引き、手に汗握る

緊張感、知略を尽くすバトル、勝利の愉悦と達成感。…まあ、ネットゲナ訳だが。  
い、いや！？違うぞ諸君！！前の俺がネットゲ廃人であったり、課金で我が家の  
生活金を食いつぶしてなんか無…（。°。°）ハッ！  
ま、まあ、そんなことは置いておいて、早くわかる所まで出ないと、さっきみたいにモンスターと会っちまう…

十分後

「ふっざけるなああああああ！！！！」  
ドドドドドドッ

「こつちくんなああああああ！！！！」  
絶賛追われ中

悪循環はまだ終つてはいなかった！  
「誰か助けてええええええええええ！！！！」  
もー神様でも誰でもいいからお助けええええ！！  
『ライトニングブレイカー』

世界が、白に、染まった。

S i d e o u t

S i d e o r d e r

白い閃光が放たれた跡には夥しい数のモンスターも亡骸と呆然と  
している一人の少年。

閃光の主は遙か高みからそれらを眺めていた。

（…なんで逃げ回っていたんだ？まあ、これほど数がいっきに出た

のなら分かるが、

数体なら楽に倒せる雑魚モンスターだろう。）

彼はそれらから興味を無くしたらしく、どこかへ去ろうとした時、ぞわっ

（なんだ！？この違和感、いや嫌悪感は）

嫌悪感がする方を見るとさっきの少年が危なげな眼をして立っていた。

その瞳は

紅くそまっていた。

（！！！！なんだあの目は？『分析』<sup>アナリクス</sup>）

分析魔法は対象の状態や大まかなステータスが分かる。

彼が使った魔法ではステータスのランク、称号を見ることができ、そして彼は今度こそ心の底から驚愕した。

（Unknown！？ステータスが見えない！！隠蔽魔法の一種か！？いや、

隠蔽魔法が使えるぐらいならこの程度の雑魚共、一瞬で焼き払うだろう。

それにしてもなんだこの感覚は！？）

見たことのない状況に戸惑っている彼に、少年の眼が向けられた。眼が合った

！！！！！！！！

（ヤバイヤバイヤバイ！！！！殺される！！一瞬もなく殺される！！

だめだ、逃げなくては。でもどこへ逃げる？どうやって逃げる？無理だろう。

アレからは逃れられない。最前線でも味わったことのない威圧感。

絶対的な感覚。アレはまさに…）

死そのものだ

彼が動けない中、少年はゆっくりと、ゆっくりと

前のめりに倒れた。しかも頭から。

ごっちーん

さつきまで死ぬほどおびえていた彼でさえも思った。

（あ、痛そう……。じゃなくて！なんだ？ たんだ？ さつき感じたあの感覚は今も感じない。では気のせいか？ ならばもう一度『アナリアス分析』）

もう一度彼が調べると、少年のステータスはあのモンスター達から逃げるのも納得なものになっていた。

（見間違いか？ あせていたのかもしれん。まあいい。ひとまず用はすんだから帰らせてもらおう。そのまま彼は飛び去っていった。

ここで彼は一つ大きな失敗をする。紅い眼をしてたときの少年のステータスの異常さにめが捕らわれ称号のほうには目がいつてなかったのである。紅い眼をしたときの彼の称号をみたのなら、帰らずここで始末していただろう。

紅い眼のときの彼の称号『幻想世界の殺戮者』という称号をみていれば。

Side out

Side Soa

「…あつぶねえ」

なんか上の方からすっごい光がびゅーんって来て、どかーんってなった。いや、マジでそんな感じ。やべえ、死ぬところだった。それにしても、さっきのプレイヤー、謝りもせずに行ったな。

ソレハスコシ「礼儀」ガナツテナインジャナイカ？

「まあ、いつか。あれだけの魔法が使えるんだから最前線で戦うプレイヤーなんだろ」

魔法。数年前では小説やアニメの中だけでの空想、妄想、幻想。

だが、今ではとても重要なものになっている。

魔法だけじゃない。生活から趣味まで、全人類は一変してしまった。そして、なにより変わったのは、生活に戦闘が組み込まれた事だ。安全を守る為には、モンスターを狩らねばならないし、食料も手に入れない。

そして、元の世界に戻るにはあの塔を攻略しないといけない。

と、考えられている。

俺は元の世界に戻る必要は無いと思うがな！

この世界が、こんな幻想に包まれたのは約二年前のことだった。

## 第零話 プロローグ前（後書き）

処女作なのでご容赦ください、  
ですが、意見などがあればビシビシ言ってください。  
よろしくお願いします

## プロローグ

2029年

連合国家U・S・E（Union・states・of・Empire）通称皇国家が出した最優先プロジェクト「Project・Restart」皇国家皇帝「アイリアス・A・Z・アイルンハルト」が考える用に世界を改変するという無謀ともいえるプロジェクト。

だが、皇国家は技術、軍事力ともに優れており、その力は皇国家を除く他国が総結集しても、余裕であしらえるほどだった。と、同時に圧倒的な科学力で世界にその力を知らしめていった。

また、軍の練習用に作られたVRシステムは、一般家庭でも所有できるまで広まっており、生活からゲームまでありとあらゆる事をサポートしてくれるぐらいに高性能だった。

また、VRを使えるのは2000年代にはやった家庭用ゲーム機などのように、

据え置き機ではなく、体につけて持ち運べるような携帯型だった。人々はそれを「Devise」と呼ぶ。

またデバイスは改造から自作まで許されており、コアなゲーマーなどは、自分用にカスタマイズしてつかっていた。

かくゆう主人公もネットゲが好きで自分のデバイスを改造したのだが、改造の方にはまってしまつてネットゲを疎かにしてしまうほどだった。

彼は幼少期から親が買ってきた機械仕掛けのおもちゃを分解して新しい物を創る事に長けていた。

その腕はネット上で「お前が神か」と言われるほどだった。

彼は自分が改造したデバイスを手で売って一儲けした。  
そしてその金を使い、リアルマネートレードRMTをして最前線でも手に入りにくい極レア武器防具を装備した。

だが、所詮は初心者。そのへたつぷりはネットゲ上で「チート装備のンサー初心者」という二つ名がつけられるほどだった。

たしかに俺は二つ名が欲しかったが、それは厨二的じゃなかった。いいモノであつてこんな情けないモノではなかった……  
と、orzの格好をした彼は語った。

そんな彼にもお気に入りのゲームがあつた。世界で初めて発売されたVRMMORPG。

「Real World Online」まさに、というような名前に、とくに変わり映えもない普通のRPG。

剣と魔法のアクションバトル。特徴があるといえば、翼が生えて飛べるぐらいのシンプルなRPG。

だが、現実世界を完全再現したそのクオリティ、職業の多さ、果てしなく長いストーリー

それは全世界の人を虜にしてしまうほど魅力的だった。

残念かどうかはわからないがこのゲームには課金アイテムやRMTが何故か

なかった。彼は自分のレベルにあつた装備をしていた。

もちろん初期装備である。

と、思うが実は結構レアな装備を所持していたもともと戦闘がそれほど得意ではない彼は生産系の職業を手に入れた。

現実世界でも発揮したその物創りに関する才能のおかげで装備もお金も結構持っていたが、戦闘をあまりしないのでレベルはいまだ45。

一般プレイヤーが初めて一カ月でだいたい15レベル上がる事を考えると今月でちょうどプレイ一年になる彼がほとんど戦闘をしてないのがわかる。彼に戦闘は向いてなかった。

武器をつくる時、ほとんどのプレイヤーが素材を持ってきてくれるので

客の注文が来た時にぐらいいしか装備は創らない。というか創れない。生産スキルのレベルに自分のレベルが追いつけなかったのだ。

ちなみに彼は生産系のスキルはすべてレベルが上限に達していた。彼は積極的に戦闘しないが、それでも暇な時は自分で素材を探りに行く。

だがほとんどの場合、常連の客とパーティーを組んで高レベルが行く所に憑いていく  
いわゆる寄生をしてレアな素材を全部もらって自分用や展示用の武器を創ったりした。

いつしか彼は、彼があこがれるような厨二的な二つ名を手に入れた。  
アンリミテッドメイドワークス  
「無双生産」それが彼の二つ名だった。これを知った時、彼は泣き崩れた。

やったよ、遂に俺やったよ、とうわ言のように繰り返す姿を見て客が数人はなれていったのは余談

そしてこれからも、彼は面白ろ可笑しくそんな生活を続けていつて、いつしかゲームに飽きる。

そんな風に彼は、彼らは人生を送った。

送るはずだった。

だが、

2030年、二月十日「Project - Re:Start」決行  
事前の連絡もなくいきなり世界は

改変した。

彼は「Real World Online」のプレイ中だったが  
急にログアウトした。

今までになかった事態に緊張したが、すぐに再接続した。だが、繋がらない。

「メンテナンス中」というアナウンスが帰ってくるだけ。

あれ？メンテナンスなんて今までであったっけ？と彼が思い起こそうとした瞬間

さらさらさら

突然体が、部屋が、端から砂みたいな光の粒になって消失していった。

彼は驚く前に、なぜか理解した。ああ、世界がリセットされるんだと。

自分は消去されるんだと、プロジェクトが始まったんだと。

体が、存在が、自我がさらさらと端から消えていった。

彼が消える直前に感じたものは、どこかでみたような紅い空と、ときどき聞いた、どこか機械質で、それでいて少しさびしげな声だった。その声は確か、こんな事をいっていた。

「Welcome to the New World!」

## プロローグ（後書き）

ご意見があれば、よろしくお願いします。

## 第一話 「説明」(前書き)

なぜだろう、変なテンションになりました。開いてくれてありがとうございます。

## 第一話 「説明」

Side Soa

気が付いたら俺は知らない町にいた。

あれっ、たしか俺は自分の部屋にいた筈だ。それで・・・

「っ!?!」

そうだ、思い出した。たしか世界が改変されて・・・  
でも、そしたらなんで俺はここに?てか、ここどこだ?

「はあ・・・」

俺は溜め息をつき、つい、いつもの癖でRWOリアルワールドオンラインでのステータスを表示させる動作、右腕の指を二本立て下に振り下ろす動作をした。すると・・・

「なに・・・!?!?」

ステータスが表示された。RWOでのステータスとまったく同じだった。たぶん。

いや、よく覚えてないが、スキルの熟練度やレベルから見て間違いないだろう。

いや、つまりここは「RWO」の中なのか?

「いや、違うよっ?」

「っ！！！」

なんかさっきから驚いてばかりな気がする。  
じゃなくて！誰だ！？

後ろを振り返ってみると・・・

ふりふりのスカートを着た

オッサンがいた！

へ、変態さんだああ！！！！

「うん？どづしたんだい？」

「い、いえ。なんでもありません」

やっべええええ！気持ち悪！え？何これ？何のフラグが立ったの！？  
え、そつちいつちやう系！？え、そうなの！？

「・・・ナニを考えているかは聞かないがひとまず説明させても

らおう」

「．．．またつつこんだら話が進まないな、素直に聞こう。」

「僕は別に突っ込んでもらってもいいんだがね」

「ウホッ、じゃなくて、いいから話せよ！もう話が進まねえよ！」

「乗ってきたのは君じゃないか．．．、ゴホンッ。もう説明するね。この世界は、もともと君たちがいた世界にVRMMORPGの「Real World Online」が上書きされた世界で、そのおかげでRWOのステータス「ちよ、待て！」

「転生モノと思っただか？甘いな！！異世界モノだ！！」

「．．．なんか電波が。それより．．．」

「マジですか？」

「マジです」

マジかよ

「てか、世界がU・S・Eのおかげで改変されたのは解るが、なんでRWOなんだ？」

「RWOプレイヤーがU・S・Eのお偉いさんにいたのか？」

「さあ、何故だろうね。それは僕にも解らないよ。てか、君、理解というか納得するの早いね」

「「うーいう超展開は、出来るだけ信じるようにしているんです」

そっちの方が面白そうだからね！

「そうか、こっちも説明が早くすんで嬉しいよ。じゃあ、説明を続けるよ。」

と、いつてもルールはだいたいRWOと同じだからそこら辺の説明はいらないね。

ただ、覚えていてほしい。ここがいくら「Real World Online」と似ていても

ここは現実世界。君たちの現実だ」

つまり？

「お腹は減るし、トイレも行く必要がある。性欲も溜まるし、殺されれば死ぬ」

へー。

「君は反応が薄いね。てか、怖くないのかい？」

なにがだい？永沢君。

「永沢君じゃないけどね。死ぬのがだよ」

あー、まあ怖くないね

「なんでだい？今まで来た人はこれを聞くと大抵びびってしまっただが？」

うーん、あれだ。俺は死んだことがないからな。

「うん、そうだよな。当たり前だよな。」

俺自分が経験した事しか信じない人なんだよね。だから、いくら他人が「死ぬのは怖い」

とか言っても、信じれないというか、うーん。いいにくいなあ。

「・・・ふーん、君はそういう人なんだね。変ってるね」

むしろ他の人間が変わってるんだろう。だってさ、『死』を体験した事ないのに

『死』が怖い、なんて言う。なんて「戯言」まさに「傑作」だろ？

「君が西尾維新のファンだという事は分かった。いやあ、本当に君は変わってるよ。」

同じ「僕」からみてよね」

ははは、そういう言い方をするとあなたがまるで「他の人」じゃないみたいじゃないか

「うん？そうだよ？僕は君だよ」

「嘘だっ！俺がこんな変態なワケがないっ!!」

「まあ、外見はランダムだからね。それに、自分を納得させる方法は自分が一番よくわかってるだろう？」

そうはかぎらないと思うが、そうかもしれないな。

てか、あなたの言う事を信じたとして「お前」が「俺」だったらわざわざそういう質問をする必要はないと思うが？

「僕はあくまで説明役だからね、余計なモノは省かれているのさ。たとえば「記憶」とかね。」

だから僕はほとんど別人だよ。ただ根本が君と同じなだけ。というか、気が付いているかい？君、ほとんど声に出して言葉をいってないよ。」

あ、本当だ。テレパシーってやつですね。

てか、お前が俺だったら、もう少しまともな外見をしてくれよ。頼むから。

精神的にツライ。

「どうしようもないね。だったら、早く話を終わらせるしかないよ。ん？まだ話は終わってないのか？だったら早く終わらせるよ。」

「わかってるよ。じゃあ、最後に質問を一つ。」

お前、この世界で生きるか？」

あ、じゃあ元の世界帰ります〜。

「お願い、シリアスな場面だからちゃんと答えて。いや、マジで」

『「シリアスプレイヤー真剣殺し」それが僕の過負荷だ』

「うん、球磨川君はわかったから、そろそろ真剣に答えよう」

分かったよ、しょうがないな。

「生きてやるよ、この世界で！」

「ああ、よかった。生きてくれないと僕が君を殺す処だったよ」

死亡フラグ直前だった！あぶねえ！

「おや、死んでも怖くないんじゃないかなかったっけ？」

生きることに執着してるんです。でも、死んでも別にいい、って感じです。

「意味分らないよ」

俺も分からなくなってきた。てか話は終わってたろ。早くどっか行けよ。

俺の精神の為に。

「ああ、そういえば僕はふりふりのスカートを着ていたね。残念なことに」

本当にお前の格好が残念だから、早く消えてくれ。

「了解。では、これからいろいろ大変な事が起きると思うが、まあがんばれよ」

そういつて彼は消えた。

．．．セリフだけは格好いいのになあ。

そう俺が思った時、目の前にワープゾーンみたいなのが出てきた。

「・・・みたいなじゃなくて、ワープゾーンだよな、コレ」

もしかして、ここって「もう一人の自分がこの世界の事を説明するための場所」

みたいな感じの所なのか？だったらコレは最初の町に繋がっている感じ？

と、俺は思い、ワープゾーンに乗った。

すると・・・

『「はじめての解説」から「はじまりの町」に移動しますか？ Y

e s  
『No

』という画面が出てきた。

・・・やっぱり、これゲームじゃないのか？

そう思いながら俺は「Yes」を押した。

S i d e  
o u t

## 第一話 「説明」(後書き)

．．．どうしよう、当初の考えと大分ずれてきたw  
そして、文が滅茶苦茶。これから書いているうちにマトモな文になるように頑張りたいと思います。

読んでいただいております

## 第二話 「はじまりの町」(前書き)

主人公のキャラのブレようが激しいw  
開いていただきありがとうございます。

この主人公はどこへ行くのだろうか・・・

## 第二話 「はじまりの町」

ワープ先の「はじまりの町」は、いかにもRPGの「はじまりの町」という感じだった。

いや、よくわからないが、そういう感覚がしたんだ。なんでだろう。まあ、いい。ひとまずどこから行くかな…。

「ねえ！？どうなってるの！？」

「ん？なんだ？」

町の向こう側でなにやら争う声がする。

「ゲームの世界って何よ！なにかのドッキリなんでしょう！？何かの番組なんでしょ！？」

「だからね、あなたもきつと、さっき説明でここがどういいう場所か聞いているでしょう？」

「だったら今どういいう状況かわかりますよね？」

「だったらここは本当に現実世界に上書きされたVRゲームの世界だっというの！？ハッ！！」

現実と妄想をごっちゃにするのはいいかげんにしなさい！そんな事が今の技術で出来るわけ…。

「U・S・Eによる世界改変だと俺は思う」

「何！？」

いっけね。つい口が出ちゃった。

「ハハハ！これはお笑いね！じゃ、U・S・Eの王様はネットゲームがお好きだったのね！！アハハハ！」

「だったら、あなたは今のこの状況をどう説明する？」

「だから何かのドッキリなんでしょう！？それでここにいる人達はスタッフか何かで

私を騙そうとしているんでしょう！？」

「なら、そう思うがいい。」

「ええ！！そうするわ！では失礼！！」

そういつてその女は町の外の方へ去っていった

「ああ、ちよつと！！町の外はモンスターがいて危ないでs「やめとけ」

女を引きとめようとする青年に俺は声をかけた。

「なんで止めるんですか！？この町から出ると、あの人死にますよ！？」

「だったらどうした」

「ッ！！あなたは酷い人ですね！！知らない人だったら死んでもいいんですか！」

「そうなる事を選んだのはあの女だ」

「彼女が外の危険を知ってると思うんですか!!」

「ああ、知ってるだろう」

「なんでそう分かるんですか!？」

「あの女、叫ぶ前にステータスウィンドウを開いてレベルやスキルを確認していた。

たぶん、ああやって追いかけてくる人を外でモンスターに殺させようとしたんだろう」

「なっ!! あなたはそれを見たから放置したんですか!？もしかしたら偶然ステータスを

開いて、そのせいで錯乱したのかもしれないですか!？」

しつこい、いいかげんにしてほしい。あのDQN女の方がサッパリしていてまだマシだ。

こういう「偽善者」が一番腹に立つ。

「だいたいそんな事いうならあなたが彼女を止めた後で話を聞けばいいじゃないかったですか!!」

あなたは他の人の事なんてどうでもいいんですね!!最低ですね!!

「!!」

ああ？

むかつく、なあ。

むかつく。むかつく。

むかつくむかつくむかつくむかつくむかつくむかつくむかつくむか





そしたらお互いに本望だろう。

なあ、お二人さん

そしたら満足だろう？

「・・・なあ、お前」

「なんですか!？」

「いつペン、死んでm「はいはい、お二人さん!お、ち、つ、い、て、」

なんか変な女が乱入してきた。

これから俺様のかっこいい殺戮シーンだていうのになんなんだよ一体。

「声に出てるよ、君ってまともな感じなのに厨二病だったんだね」

なっ!まさか「むかつく」から始まった俺の超かっこいい呪詛も口に出たというのか!?

そしてさらにその女ア!俺が厨二病なワケないだろう!

俺はもっと・・・こうかっこいい何かだ!!

「はいはい、で?いつまでそうやって「偽善者」のフリをしているの?キアラ」

「・・・バラさないでくれよう、アカネ。これからが面白い処だったのに」

なん…だと…？  
よくわからない…

「すまん…状況が把握できないのだが…」

俺がそういうと、さっきまでぎゃーぎゃーいつていた「偽善者」が  
微笑を浮かべながら  
こう言い始めた。

「ああ、ごめんごめん。実はいままでの、演技だったんだ。さっき  
の女の人がステータスを  
確認していたのも演技。よく気がついたね。気に入ったよ」

ナ、ナンデストー！

「もちろんあの女の人もグルだよ。さっきからあちこちでこうやっ  
てるんだ」

「なんの為に、だ？人を弄んでるなら悪趣味だぞ」

まあ、見当はついてるが。  
だいたい説得しようとした俺の心意気に感動して改心したとかそんな  
なんだろう。

「違うよ、僕達は一緒に冒険してくれる仲間を探していたんだ！こ  
うやって争うフリをして止める人達を僕達のギルドに誘っているん  
です！」

おお、全然違った、恥ずかし！  
へえ、でもそういうコト。

なるほどなるほど

「あなたの反応は意外でしたが、どうです？僕達のギルドに入りませんか？」

．．バカか、こいつら。

「断る」

「なんでですか！？僕がこうやって誘ってあげてるのに断る！？それもいままではなかった反応ですね。面白い。いいですねあなた！ますますあなたが欲しくなりました」

「やっぱりそれが本性かクズ。一体手前は何様だ？人の事を下に見て、自分以外は自分以下だと思っっているのか？だったら正に「お笑い」だね」

「ハハハ！僕にそんなことをいったのも君が初めてだよ！  
ていうか君、僕が誰なのか知って「知らねえよ」だよね！  
知ってたら恐れ多くてそんなこといえないだろう！」

「じてか、お前一体誰だよ」

「では、教えてあげよう。」

僕が、僕こそがあの「トリックソーダ奇術剣」のキアラだ！」

誰？

「なっ！最前線で活躍している僕を知らないという事は、お前低レベルプレイヤーだな？」

「．．．まあ、最前線っていうか闘ってもいないし低レベルだが、ウチに来た事があるお客さんではないな。」

「と、なるとあいつのギルドは専属の鍛冶がいるということか。お金持ちだねえ。」

「で？」

「だから、最前線で活躍する僕がわざわざ誘ってやってるんだぞ！？喜んで受けるのが普通だろう！？」

「ああ、俺そついうの興味ないんだ」

「低レベルプレイヤーの見事な言い訳だね！まったくこれだから負け犬は。」

「時間の無駄だったよ！行こうアカネ。こんなクズ、相手にしてるのがもつたいない」

「ああ、待つてよキアラ。じゃあね、少年」

「そついうと二人は町の外へ向かっていった。」

「．．．「奇術剣のキアラ」．．．ねえ」

「知らなかったが、やっぱり俺も戦闘技術を上げた方がいいかもな。」

「ねえ、そのあなた」

それにしても、まったくム力つくやつだったぜ。

「ねえ、ちょっと」

人の言う事聞かねえし、上から目線だし、なんであんな奴が最前線で戦えるんだ？

「ねえ！聞いているの？」

もちろん確信犯でした。お約束だよな。

「だからって殴らなくてもいいじゃないか」

「あんたがいつまでたっても返事しないからでしょうー！」

「暴力的だなあ」

「不可抗力だった。反省はしていない」

「おまわりさん、ここに犯罪者がいるよう」

面白い奴だった。

「で、何かよう？」

「温度差激しいわね、あんた」

「そついう性格なんで」

俺はもともとこういう性格だった・・・と思う。  
最近キャラが激しくブレてきた。どうしよう。

「何一人で頭抱えて踊ってんの？」

「こっちの話です」

踊ってはないと思うが

「あんだ、なかなか面白いわね」

「よく言われます」

「自画自賛！」

「自己賛美です」

「それ、意味同じじゃない!？」

「知りません」

「無責任！」

「自己責任です」

「だったらあなたの責任じゃない!」

「まあ、それは置いといて」

「勝手に置くな！」

前ならえにした手を横に持っていったら手を叩かれた。痛い。

「なんでそこでorzの格好になるの!?!」

「おちよくるのもいい加減飽きてきたので話に入りましょう」

「あなたが話をややこしくしたんでしょう!」

本当におもしろい奴だった。いい加減落ち着こう。

「分かった。おちよくったのは俺が悪かった。バカにしたのも俺が悪かった。」

でもそれは、お前が面白かったからだ。悪かった」

「っ．．．、それならいいのよ!まったく．．．」

面白かったなら、まあ許してやるわよ」

はたして彼女はツンデレだった。  
キャラ濃いなあ。うらやましい。

「あなたも十分濃いわよ．．．。もう!話が進む所が始まらないじゃない!」

「だから、もう謝っただろう」

「偉そうね!まあ、いいわ。で、話っていうのはね．．．」

緊張した顔で彼女は口を開いた。

「あたしと契約してまほh「お前こそネタじゃねえか!!!」」

危ねえ!色々危ねえ!!

てか、こいつオタクじゃねえか!!

「やっぱり話が進まないじゃねえか!」

「うん、今のは私が悪かったわ。でも一度言ってみたくて・・・」

「こないたいタイミングで言ってもしょうがないだろ!いいタイミングだったかな!」

「あ、そう・・・そんな褒めなくても／＼・・・」テレテレ褒めてねええええ！  
なんでそうなるのっ！こいつもDQNか！！

そう思ったら、彼女は急に真剣な顔になって語り始めた。

「実はね・・・」

「わたしとパーティーを組んで欲しいの！」「いいよ」

「即答！文章にしたら一行あける間もないぐらいの即答！え、いいの？そんな簡単に！？」

「だって、お前面白いじゃん」

「え、そんだけ？そんな理由で？あんたは」「それに」「なによ？」

「お前かわいいじゃん。」

「へ？」

「かわいいは正義。かわいいが宇宙の真理！」

まあ金髪巨乳もいいが俺的には黒髪ロングがいいと思うね！

その点、お前は黒髪ロングだし顔もいいし性格も良さそうだし、胸は・・・ま、まあ置いておいて。とにかくお前俺の好みだし、なにより気が合うしだからパーティーを組んでもいいと思ったんだが・・・

ん？どうした？顔が赤いぞ？」

「い、いや！なんでもないノノと、とにかく一緒にパーティー組んでくれるのね!？」

「だからそういつてるだろ？これからよろしくな」

「よ、よろしくノノ」

どうしたんだ？一体？

まあ、とにかく信頼は出来るかどうかかわからないが面白い奴だな。

これからしばらく楽しそうだ

「ああ、そういえば。お前、名前は？」

「え？ああ、私はツキナ。あなたは？」

「俺は・・・」

俺は本名を答えようとした。だが・・・

「あれ？」

名前が思い出せない。なんとなくこんな感じ、というのはわかるがハッキリと分からない。

「どうしたの？」

「いや、何故か名前が思い出せないんだ」

「ああ、本名は思い出せないわよ、皆」

何！？

「どういづことだ！？」

「なんでも、この世界で生きる為、前の世界での名前は忘れてもらって私は説明してもらったけど・・・」

なん・・・だと・・・？アイツそんな事一言も・・・。

「じゃあ、お前の名前はなんなんだよ？」

「私のはRWOでのプレイヤーネームよ？私が知ってるうちでは新しい名前を名乗ったりしている人もいたわね」

なるほど・・・

「だったら俺もプレイヤーネームを名乗るか」

「うっし！で、改めてあんたの名前は？」

俺の、新しい名前は

「・・・ソアだ」

「ソア、ね。変わった名前ね」

「うっさい」

「アハハ、まあよろしくね！ソア！」

「・・・よろしく。ツキナ」

こうして、俺は「いつと出会った

## 第二話 「はじまりの町」(後書き)

あいつも変わらず超展開w

これからどうしよう・・・

なるようになるでしょう！(え

このしたのはおまけです。

読まなくても本編には関係ないので読まなくても大丈夫ですw

おまけ

「ソア、あんた顔・・・」

「・・・目つきが悪いってか？よく言われる」

「あ、いや。・・・か、体つきがいいわね」

「それは低身長な俺への当てつけか？」

「うっ！い、いえ。なんでもない・・・」

(せっかく、褒めてくれたから「うちも容姿を褒めようと思ったのに・・・」)

「？なんだよ？」

「なんでもないわよっ！」

「？(なんで怒ってるんだ?)」

F i n

こんな感じできるときおまけがあると思います。  
これからもよろしく願います。  
読んでいただきありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2187ba/>

---

改変世界がネットゲで

2012年1月6日22時52分発行